

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.76

2011.3.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.76 目次

「野鳥のガラス衝突死体から見えるもの」	2-7
「日本獣医生命科学大学獣医学科 4~5 年生対象・油汚染鳥救護特別実習」開催報告	8
鳥インフルエンザについて	9
寄稿写真のご紹介	10
新任のご挨拶	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

「野鳥のガラス衝突死体から見えるもの」

日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科
保全生物学的研究室
服部 恵子・梶ヶ谷 博

はじめに

野鳥は自然界でしばしば事故に遭遇するが、そのひとつに人工物への衝突があることはよく知られている。そうした野鳥が衝突する人工物には様々なものがある。たとえば、衝突の対象物には、航空機や自動車、風車、高圧線、窓ガラスなどが報告事例の多いものである(Banks 1979、Klem 1991、Wallace 2001、Cleary et al. 2006)。その中でも、窓ガラスへの衝突は、人工物と関わる野鳥の死因の中でも最も重大なものの一つといわれている(Klem1989、柳川 1993)。また、希少種であるオオタカやハイタカ、ツミなどでもガラス衝突被害が報告されている(柳川 1998)ため、保全生物学の観点からも窓ガラス衝突は解決すべき問題の一つと考えられている。ここでは実際にガラス衝突によって死亡した様々な野鳥について当研究室が死体検査を行った最近の結果を述べ、あわせて野鳥のガラス衝突研究の現状をまとめてみたい。

検査対象

死体検査では 58 個体を用いた。これらの個体は、a) ガラスの直下で死亡していた、あるいは b) ガラスに衝突痕が残っていた、c) 衝突音を聞いた、等の状況証拠から、ガラスに衝突して死亡した可能性が高いと判断されたものである(表 1)。死体の拾得場所は、都留文科大学(n=21 山梨県都留市)、くにたち郷土文化館(n=19 東京都国立市)、山梨県都留市市内(n=13)、日本野鳥の会鳥WING(鳥と緑の国際センター、n=2 東京都日野市)、東京都江戸川区西葛西のビル(n=1)、福生市立中央図書館(n=1)、日本獣医生命科学大学(n=1 東京都武蔵野市)以上 7 ヶ所である。各施設で拾得された衝突個体は、基本的には冷凍庫(−12℃)で保存したが、数個体については冷蔵保存後に脳組

織の病理検査を行った。なお、野鳥の年齢査定は不確実要素が多いため、衝突個体の年齢については調査しなかった。

検査結果

表 1 に死体検査で使った鳥種を拾得場所別に示した。検査した鳥は 14 科 18 属 20 種であった。全拾得場所のうちキジバトは 4 ヶ所、キビタキとシメ、メジロは 3 ヶ所とそれぞれ複数ヶ所で拾得されていた。

表 2 に死体検査を行った鳥種が拾得された場所における拾得季節を示した。拾得季節をみると、くにたち郷土文化館では秋(9～11 月)に 9 個体拾得されており、他の季節に比べて倍近く拾得されていた。一方、都留文科大学では夏(6～8 月)に 9 個体拾得されており、他の季節に比べて倍近く拾得されていた。しかし、都留文科大学の近隣である都留市中央では、夏は拾得されなかった。

図1に部位別の損傷割合を示した。各部位の定義は以下の通りである。頭頸部は嘴から頸椎の末端まで、胸郭は胸椎、肋骨、胸骨によって構成される体幹部、腰腹部は胸骨遠位の末端部から骨盤に囲まれた部位、翼は肩部から翼の先端まで、脚は大腿近位の関節部からつま先まで、内臓は胸腔および腹腔に含まれている臓器とした。

最も損傷の割合が高かったのが頭頸部で 58 個体中 48 個体(83%)、次に損傷の割合が高かったのが内臓で 58 個体中 46 個体(79%)であった。最も損傷の割合が低かったのは翼で、58 個体中わずか 2 個体(3%)にしか認められなかった。その他の部位の損傷の割合は 58 個体中、胸郭 26 個体(45%)、脚 6 個体(10%)、腰腹部 3 個体(5%)であった。頭頸部の損傷は主に頭蓋出血と嘴の変形であり、内臓の損傷は主に肺出血と肝破裂であった。

脳の病理組織学的検査の結果、いずれの個体でも脳の挫滅による物理的破壊性の変化や出血は認められなかったが、いずれも内臓の損傷(肺出血あるいは肝破裂)を伴っていた。

表1. ガラス衝突によって死亡した鳥の拾得場所の記録

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	計
キジバト	2	5				1	1	9
キビタキ	4		3		1			8
メジロ	3	4		1				8
イカル			5					5
シメ	1	2	2					5
アオゲラ	3							3
カワセミ		3						3
コゲラ			1	1				2
シジュウカラ	1	1						2
シロハラ	2							2
スズメ	2							2
アカハラ		1						1
オオルリ		1						1
ソウシチョウ			1					1
ツグミ	1							1
ツバメ	1							1
トラツグミ		1						1
ヒヨドリ	1							1
ホオジロ			1					1
ムクドリ		1						1
計	21	19	13	2	1	1	1	58

- ①都留文科大学
 ②くにたち郷土文化館
 ③都留市市内
 ④日本野鳥の会鳥WING
 ⑤西葛西のビル
 ⑥福生市立中央図書館
 ⑦日本獣医生命科学大学

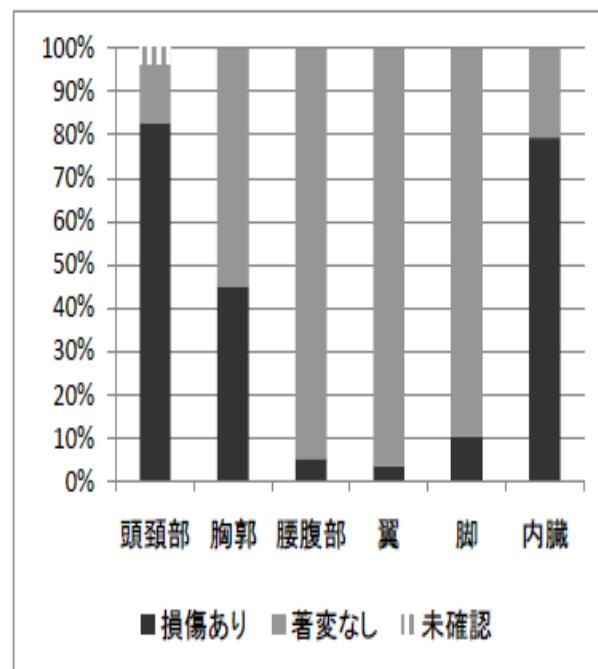


図1. ガラス衝突死をした鳥における全身の損傷分布の比較.

表2. 季節別にみたガラス衝突死体数の地域差. 季節で見ると合計数に差はみられないが、地域でみた場合、わずかに差が認められるようである.

拾得場所	春 (3～5月)	夏 (6～8月)	秋 (9～11月)	冬 (12～2月)	計
都留文科大学	5	9	3	4	21
くにたち郷土文化館	4	4	9	3	19
都留市市内	5		3	5	13
日本野鳥の会鳥WING		1			1
西葛西のビル					1
福生市中央図書館			1		1
日本獣医生命科学大学	1				1
計	15	15	16	12	58

58 個体のうち、ムクドリ、シロハラ、キジバトの各 1 個体において、胸郭に共通の所見がみられた。すなわち体幹についてみると、ムクドリは竜骨突起前端部に沿った左側に開放創がみられ、右側の肋骨が骨折していた。一方、シロハラとキジバトは竜骨突起前端部に沿った右側に開放創がみられ、左側の肋骨が骨折していた。また、翼についてみると、キジバトが右翼の橈骨遠位に骨折を付随していたのに対して、ムクドリの左翼とシロハラの右翼には、同側の手根骨基部に点状内出血が認められた。つまり、片翼の点状内出血ないし骨折と竜骨突起前端部に沿った開放創、さらには肋骨の骨折の分布パターンが一致した。手根骨基部の点状内出血はごく軽微であったため、損傷の分布には含めていない。しかし、58 個体中 39 個体の手根骨基部を確認したところ、キジバトの橈骨骨折を除いて、16 個体の左翼あるいは右翼のどちらか片翼に内出血が認められた。2 個体は両翼の手根骨基部に認められた。

考 察

解剖学的視点からみた衝突

死体検査の結果、多くの個体に頭頸部と内臓の損傷が認められた。頭部の損傷に関しては、Klem (1990) と柳川 (1993) による人工建造物への衝突個体の病理所見で、脳出血と嘴の破損が特徴的であると記されている。しかし本研究では、脳の病理組織学的検査を実施した 5 個体にはいずれも脳組織に病理組織学的な著変は認められなかった。これらの個体は胸郭や内臓に損傷を受けており、肺出血や肝破裂を起こしていた。このことから、脳出血以外に内臓の損傷がガラス衝突時の死因に大きく関与している可能性が示唆された。非開放性の内臓損傷は強大な外力によって起こることが多い(錫谷 1972) ため、多くの事例で鳥がガラスに衝突した時、非常に強いエネルギーを伴っていたものと考えられる。衝突時の力は $1/2 \times (\text{質量(体重)} \times \text{速度の 2 乗})$ 、つまり運動エネルギーに依存すると考えられるが、内臓の損傷は、体重がわずか 9g のキビタキや 10~11.5g のメジロにも

認められた。従って、衝突時のエネルギーには速度が大きく影響しているものと考えられた。一般的な野鳥の飛行速度は 35~55km 程度と推測されており、この点から鳥はガラスという障害物に対して飛行速度を減速せずに衝突したと推察された。ただ、ここにもう一つ重要な因子がある。衝突後の自由落下(落下速度は「 $2(g \times \text{高さ})$ 」の平方根に等しい)を考えた場合、ガラス衝突した場所の高さは大いに問題となるのであって、仮に 10m の高さから自由落下したとすると地上に到達した時点で時速 50km にもなる計算なのである。この速度は飛行時の鳥の速度とほぼ等しい。さらにここに落下場所の素材が条件として加わってくるため、事態は複雑となる。この落下の影響についても我々は実例をもとに検証しているが、それについては別の機会に譲ることとしたい。

翼に骨折や脱臼などの重篤な損傷がみられたのはわずか 2% であったが、軽微な変化の発生は案外多く、手根骨基部の点状内出血が確認した 39 個体のうち半数近くに認められた。このうち一部の個体は両側に、大部分は片翼のみに認められた。さらにこの片翼の内出血は、ムクドリ、シロハラ、キジバトの各 1 個体の胸郭にみられた竜骨突起前端部に沿った開放創と肋骨の骨折に付随していた。そのため、外力が鳥の体の左側ないしは右側のいずれか一方から及ぼされたと解釈できる。すなわち、それは斜め方向からの外力であり、ガラス表面に対して直角ではなく、多少の角度をつけて斜め方向から衝突した可能性が考えられた。手根部も内出血が両翼もしくは認められなかった個体に関しては、ガラス面に対して正面方向から衝突して衝撃が両翼に分散されたものと思われる。こうした鳥がガラス面に飛び込む角度の違いは、ガラスの反射や透過状況の違いに起因するのかもしれない。

種類の特徴

衝突個体の鳥種構成は、拾得場所によって異なっていたが、これは拾得された地域による特性と考えられた。くにたち郷土文化館では、キジバトやメジロが多く拾得されていた

が、じつは別に実施した文化館での生態調査では、種不明の場合を除いて、最も多く記録されたのはヒヨドリであった。しかし、ヒヨドリの文化館での衝突は、最近になって2例記録されたのみで、本研究データには1個体も含まれていなかった。これから、我々は衝突しやすいには鳥種の特性があるものと考えている。Snyder(1946)は、ツグミ類が衝突しやすい鳥であると述べているが、それは茂みによって制限された通路で光を頼りに素早く飛行するためとしている。また、Klem(1990)は地上や地上近くで活動するツグミ、ムシクイ、フィンチ類が衝突しやすいとも述べている。本研究における死体検査で使用した個体でも、14科中4科でツグミ科の鳥が目立った。また、本研究では、キビタキやシメ、メジロ、キジバトが複数ヶ所で拾得されたため、これらも衝突しやすい鳥種である可能性が考えられた。

しかし一方で、死体からの推測には限界もある。本研究の観察中にも1例、目前での生還した衝突事例が目撃されたが、このような衝突しても死に至らない場合がおそらく多いからである。そのような死に至らない衝突事例が、実際のどのくらい発生しているのかはいずれの研究者も明らかにしていない。

衝突の発生原因

窓ガラス衝突に関係する要因を探る研究はよく行われていて、渡りや時刻、隣接する植栽、ガラスの大きさ、猛禽類の存在などが問題視されている。加えて、物理光学的な側面からは衝突の原因は主にガラスへの風景の映り込みや透過であると指摘する研究者も少なくない(Banks 1976、Jonson and Hudson 1976、Klem 2006)。我々はこのガラス面での光学的な現象も別に検証しているが、紙面の都合上、この点についてもここでは触れない。

季節

拾得季節についてみると、都留文科大学では夏場(6~8月)に多かったが、近隣の都留市中央では、夏には拾得さ

れなかった。同じ都留文科大学で調査した西(2010)によれば、9、10月の衝突事例が最も多く、次いで1、2、4月が多かった。このように同じ地域でも衝突個体の拾得月に違いが生じている。衝突の時期について、Klem(1989)は1975年から1976年にいくつかの施設や住居から衝突のデータを集めて分析した。その結果、冬は種子食の小鳥が窓に隣接した餌箱に誘引されて衝突し、春と秋は渡り鳥が日中に住居付近で活動して衝突し、夏は繁殖期の鳥、特にキバシカッコウが衝突していた。そして、夏の繁殖期には衝突は減少するが、季節による明白な差は認められなかったと結論付けている。同時に、衝突が発生する時間についても分析しており、日中の朝に多く衝突すると述べている。O'CONNEL(2001)は、1993年5月から1994年5月まで4つのオフィスビルの周囲を毎週1回調査し、衝突死した鳥を記録した。その結果、春と秋の渡りの時期に多くの衝突が確認されたという。

周囲環境の影響

衝突要因としての環境要素の分析もよく行われてきている。ガラス周囲の環境について、Klem(2004)は餌場とガラスとの距離に着目した。落葉性の混交林とトウモロコシ畑の境にガラス1枚につき1つ餌台を設置した結果、餌台とガラスとの距離が遠くなるほど衝突死亡数は増加したという。Gelb and Delacretaz(2006)は、衝突が多いビルで春と秋を中心に衝突数と個体が落ちていた位置を記録した。さらにビルに面した高木の数を数えると、衝突個体は高木が多く面している区域で比較的多く記録された。ガラスについて、Grasso-Knight and Waddington(2000)は、鳥の衝突痕と思われる窓ガラスに残った羽や汚れの数と、窓ガラスの大きさや建物における窓ガラスの占有率を比較した。その結果、窓ガラスの占有率は衝突と関係なく、窓ガラスの大きさも衝突と有意な関係を示さなかった。Klem(2009)は、これまでの調査を総括して、鳥の衝突は透過そして反射する多様なガラスで記録されているとした。さらに衝突は、都市や郊外、

田舎の様々な大きさ、高さ、向きのガラスで発生しているが、鳥は郊外と田舎の地上に近く高さ 3m 辺り、大き目 (2m² 以上) の窓でより衝突しやすいと述べている。

衝突防止対策

窓ガラスへの衝突防止対策として鳥の形のシールやステッカー、猛禽類の模型などが考案されているが、確実な効果の実証がされているものはみあたらない。例えば、Jonson and Hudson (1976) は、73 ヶ月で 41 種 266 個体の野鳥の衝突が発生していた全長 21.8m、高さ 15.3m、幅 3.8m のガラス張りの渡り通路に、猛禽類の実物大のシルエットを 12 枚張った。その結果、処置前に衝突がみられた 41 種のうち約 4 分の 3 の種類に衝突の減少がみられたが、一方で衝突が増加した鳥種もあった。Klem (1990) は、衝突防止対策の効果検証のために落葉性の混交林とトウモロコシ畑の境の地上から 1.2m の高さに、高さ 1.2m、幅 1.4m のガラス 5 枚を 52 日間設置した。ガラス 5 枚のうち 1 枚はコントロールとして何も施さず、残りの 4 枚には長さ 23.6 cm、翼開長 45.4 cm のハヤブサのシルエットやアメリカワシミズクのレプリカ、5 本の円筒からなるウインドチャイム、1 分間に 32 回点滅する 7W の電球をガラス 1 枚につき 1 つ施した。その結果、全部で 33 回の衝突が記録されたが、コントロールと有意な差を示した対策は認められなかったとしている。

以上、ガラス衝突そのもの、ならびにそれによる損傷の成因は複合的なもので、環境条件、ガラスの性質、建物の配置、衝突時の鳥の飛行速度、鳥の体重、衝突角度、落下距離、落下場所などの諸条件がパラメーターとなって構成されるものであると考えられた。そこには単一の原理ではなく、衝突現場ごとに原因の優先順位が異なるメカニズムが働いており、防止対策を実施する際には衝突頻発現場の多角的視点からの科学的な状況分析に基づいた解析を基礎とすべきであることを改めて実感させられた結果であった。

謝辞

本研究を行うにあたり、衝突個体や衝突情報、生態調査場所の提供等の多大なるご協力を戴いたくには郷土文化館の皆様、心より御礼申し上げます。さらに衝突個体を提供して戴いた都留文科大学の西教生さん、衝突の工学的解析にご指導を戴いた山内昭先生、貴重なアドバイスを頂戴した自然環境アカデミーの野村亮さん、日本野鳥の会の皆様、福生市立中央図書館の皆様にも心より御礼申し上げます。最後にデータの統計処理についての助言を賜った保全生物学研究室の山本俊昭講師に深謝致します。

なお、本稿は平成 22 年度の当学科大学院修士課程に在籍した服部恵子の修士論文から一部を抜粋してまとめなおしたものである。

引用・参考文献

- Banks R.C. 1976 Reflective Plate Glass - A Hazard to Migrating Birds. BioScience Vol.26 No.6
- Banks R.C. 1979 Human related mortality of birds in the United States. U.S. Fish and Wildlife Service, Special Scientific Report - Wildlife. No.215:1-16.
- Cleary E. C., Dolbeer R. A., Wright S. E. 2006 Wildlife Strikes to Civil Aircraft in the United States 1990-2005. F.A.A. National Wildlife Strike Database Serial Report Number 12
- 江口 英輔 2004 視覚生理学の基礎 比較生理学の立場から 株式会社内田老鶴園
- Erickson W. P. and Johnson G. D., Strickland D. M., Young D. P, Jr., Sernka K. J., Good R. E. 2001 Avian Collisions with Wind Turbines: A Summary of Existing Studies and Comparisons to Other Sources of Avian Collision Mortality in the United States. National Wind Coordinating Committee(NWCC) Resource Document

ERRITZOE J and MAZGAJSKI T. D., REJT L. 2003 Bird casualties on European roads - a review ACTA ORNITHOLOGICA Vol.38 No.2

Gelb Y. and Delacretaz N. 2006 AVIAN WINDOW STRIKE MORTALITY AT AN URBAN OFFICE BUILDING. The Kingbird; 56(3):190-198

Grasso-Knight and Waddington 2000 Bird Collision with Windows on Swarthmore Campus. Report on Bird Collision with Windows at Swarthmore College

Jonson R. E. and Hudson G. E. 1976 BIRD MORTALITY AT A GLASSED-IN WALKWAY IN WASHINGTON STATE. Western Birds 7:99-107

Klem D. JR. 1989 BIRD-WINDOW COLLISIONS. Willson Bull.,101(4):606-620

Klem D. JR. 1990a BIRD INJURIES, CAUSE OF DEATH, AND RECUPERATION FROM COLLISIONS WITH WINDOWS. Field Ornithology 61(l):115-119

Klem D. JR. 1990b COLLISIONS BETWEEN BIRDS AND WINDOWS: MORTALITY AND PREVENTION Field Ornithology 61(l):120-128

Klem D. JR. 1991 Glass and Bird Kills: An Overview and Suggested Planning and Design Methods of Preventing a Fatal Hazard. Wildlife Conservation in Metropolitan Environments. NIUW Symp. Ser.2

Klem D. JR. 2004 Effects of window angling, feeder placement, and scavengers on avian mortality at plate glass. Wilson Bulletin, 116(1):69-73

Klem D. JR. 2006 Glass: A Deadly Conservation Issue for Birds. BIRD OBSERVER Vol.34, No.2

Klem D. JR. 2009 AVIAN MORTALITY AT WINDOWS: THE SECOND LARGEST HMAN SOURCE OF BIRD MORTALITY ON EARTH. Proceedings of the Fourth International Partners in Flight Conference: Tundra to Tropics. 244-251

西 教生 2010 鳥類の窓ガラス衝突要因とその対策についての考察 日本野生動物医学会誌 Vol.15 No.2:95-100

O'CONNELL T. J. 2001 AVIAN WINDOW STRIKE MORTALITY AT A SUBURBAN OFFICE PARK. THE RAVEN Vol.72(2):141-149

錫谷 徹 1972 法医診断学 株式会社南江堂

Snyder L.L. 1946 "Tunnel fliers" and window fatalities. Condor 48(6):278

STEVENS M. AND CUTHILL I. C. 2007 Hidden Messages: Are Ultraviolet Signals a Special Channel in Avian Communication? BioScience Vol.57 No.6

杉田 昭栄 2007 鳥類の視覚受容機構 バイオメカニズム学会誌 Vol.31 No.3

柳川 久 1993 北海道東部における鳥類の死因 Strix 12:161-169

柳川 久・澁谷 辰生 1998 北海道東部における鳥類の死因.Ⅲ.ガラス衝突 帯大研報 20



「日本獣医生命科学大学獣医学科 4~5 年生対象・油汚染鳥救護特別実習」

開 催 報 告

WRV事務局 箕輪 多津男

昨年(平成22年)11月13日(土)～14日(日)の2日間にわたり、毎年恒例となっております標記の特別実習を開催いたしました。今回参加した学生は計30名で、大学における「野生動物学実習」の単位取得にもつながるということもあり、皆熱心に本講習に臨んでいた様子で、会場となりました環境省・水鳥救護研修センターは、いつになく熱気に溢れておりました。

カリキュラムの内容につきましては、まず「油について」(油の性質や油汚染事故発生時の流出油の挙動やその防除法等)、「水鳥の特徴と種および生態について」(油汚染事故発生時に特に被害に遭う可能性の高い海鳥の生態等)、そして「油汚染事故に関する法律と体制」に関する講義をそれぞれ私が担当させていただきました。一方、「鳥類の病理学」(油汚染による海鳥への被害発生や影響に関する生理学または病理学的メカニズム等)の講義を、WRVの研究部長も務めていただいている日本獣医生命科学大学・教授の梶ヶ谷博先生にお願い致し、さらに、実習に繋がる「油汚染鳥の救護法」の講義については、WRVの皆川康雄副会長に受け持っていただきました。それぞれの講義は、「修了証」の発行用件を満たすために必要と考えられる内容として、WRVの内部規定により定められた項目に準拠しているものとなっています。

以上のような講義を踏まえた上で、最後に油汚染鳥の救護および洗浄に関する実習に参加学生の全員が臨みました。いつもの通り、アイガモを使いながら、目視による診断、体温測定、聴診、血液採取および検査、補液を行った上で、メインとなりますそれぞれの個体の洗浄作業を実施し、最終的に乾燥に至るまでの工程を順次実践してもらいました。なお、この一連の実習の講師については、WRV新妻勲夫会長を皆川康雄副会長を中心としながらも、今回初めて、昨年度実施した「油汚染鳥救護等に関する専門獣医師等の養成講座」の修了者の中から宗像巧獣医師、鈴木美奈子獣医師、東海林綾獣医師、そして御厨純獣医師の4名の方々に講師助手をお願いし、それぞれ学生の指導に当たっていただきました。お陰で、これまでとはまた一味違う雰囲気の中で、実習を行うことができました。

そして全カリキュラムを終えた後、学生一人一人に対して「修了証」を授与し、今回も無事に2日間のプログラムを閉じました。来年度は、大学のカリキュラムの改変の可能性があるため、本実習がどのような形になるのかは未定ですが、今後とも要請があれば引き続きWRVとして、様々な形での協力を惜しまない積りでおります。

なお、最後に本実習の委託を頂戴いたしました日本獣医生命科学大学・准教授の中垣和英先生、並びに講義および実習をご担当いただきましたそれぞれの先生方に、改めて感謝の意を表したいと思っております。ありがとうございました。



鳥インフルエンザについて

野生動物救護獣医師協会（WRV）

昨年から今年にかけ、全国各地において、野鳥あるいは家禽から H5N1 亜型の高病原性・鳥インフルエンザウイルスが、次々と検出されております。

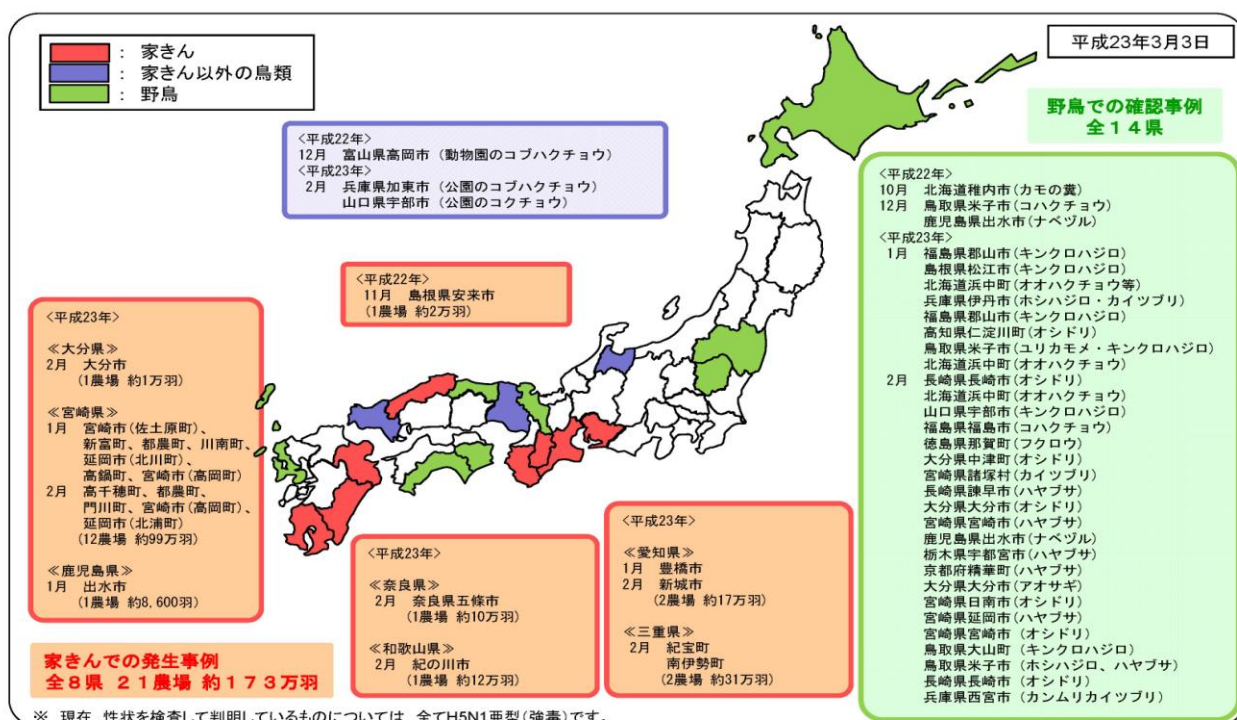
野鳥においては、キンクロハジロやオシドリ、オオハクチョウ、コハクチョウといった水鳥ばかりでなく、ハヤブサやフクロウなどの猛禽類のほか、ナベヅル、アオサギ、カイツブリ、ユリカモメなどにもウイルスの感染が確認されました。一方、最も危惧されていた家禽への影響についても、特に西日本各地の養鶏場において同ウイルスが検出され、既に殺処分されたニワトリは 170 万羽を超えるなど、甚大な影響が出ております。

こうした状況はお隣の韓国においても同様で、野鳥においては、マガモやトモエガモなどの水鳥や、ワシミミズク、コノハズク、チョウゲンボウなどの猛禽類を中心にウイルスの感染が確認されております。また、家禽については、アヒルやニワトリへの感染がやはり各地で確認され、既に多くの個体が殺処分されるに至っております。

国内においては、環境省や農林水産省などを中心として、全国すべての都道府県を始めとする自治体が、現場における対応に追われており、一方で、これに協力されておられる獣医師の方々にも、大変なご苦勞をいただいていることと推察されます。その中には、WRV 会員の先生方も多数含まれているものと思われませんが、ここで誌上を借りて、改めてお礼申し上げたく存じます。

鳥インフルエンザに関しては、内外の影響を常に考慮しつつ、慎重な対応が求められる面が多分にあり、また地域ごとにそれぞれ体制や諸事情も異なっているため、今後も様々な問題点を順次克服していかなければならないことと思われませんが、将来に向けたより良い対処法の確立に向けて、これからは何らかの形で協力関係を築きつつ、意見交換や情報交換を進めていけるよう努力してまいりたいと考えております。

日本における高病原性鳥インフルエンザの確認状況



提供：農林水産省ホームページ

寄稿写真のご紹介

前号に引き続き、星子廉彰氏からお送りいただいた、北海道における野生動物の姿をとらえた貴重な写真をご紹介します。



ホウロクシギ

撮影者：星子廉彰さん（WRV会員）
撮影場所：北海道内各地



オオハクチョウ



クマゲラ



エゾフクロウのヒナ



エゾフクロウ(フクロウの亜種)

※WRV ホームページ上のカラー版も是非ご覧ください。
(WRV ホームページアドレス：<http://www.wrvj.org/>)



新任のご挨拶

WRV 事務局 鈴木 麻衣

この度、1 月より野生動物救護獣医師協会にお世話になることとなりました、鈴木と申します。神奈川県川崎市にある、野生動物ボランティアセンターの皆川先生(WRV 副会長)に、学生時代ご指導いただいております。

「そろそろコナラを伐ろうと思って、どの木を伐るか下見に来たんだよ。シイタケのほだ木にするんだ。」—— 先日、水鳥救護研修センターの前で自治会の方とお話していた時、そうおっしゃっていました。今も地域の方々が定期的に手を入れて、この土地の環境が維持されていることを知り、大変嬉しくなりました。環境保全について考えるとき、その土地の文化や暮らす人々の生活様式が大きく関係しているのだと思います。

センターのある日野市には多摩丘陵の森が残り、このあたりは以前、薪炭林として利用・管理されてきました。水が豊かな雑木林で、ここには野鳥をはじめ様々な生きものが生息しています。歩いて帰っていると、林縁でフクロウやタヌキに会えるような素敵な場所です。

傷病の動物を野生復帰させるためにも、生息地の環境について合わせて考えていきたいと思っています。

まだまだ仕事の手が覚束ない毎日ですが、少しでも早く一人前になれるようにがんばります。どうぞ、よろしくお願い致します。



◇お知らせ◇

2010 年 12 月 31 日をもちまして、事務局の梶山あきさんが退職されました。

これまで WRV の活動にご尽力いただき、ありがとうございました。

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者（敬称略） （平成 22 年 12 月 1 日から平成 23 年 2 月 28 日）

○寄付金（一般）2010.12.6 白倉 豊 5,000 円 ○寄付金（一般）2010.12.30 柴内裕子 2,000 円

○寄付金（一般）2011.1.26 地球はともだち 31,000 円

事務局日誌 2010.12.25～2011.3.25

=== 12 月 ===

25 : WRV ニュースレターNo.75 発行

31 : 梶山あきさん 退職

=== 1 月 ===

- 04：鈴木麻衣さん 初出勤（水鳥救護研修センター） 対応：皆川
- 08：「海ゴミGO ME！2010」（ブーランシア）〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 11：神奈川県野生動物リハビリテーター資格認定検討委員会〔神奈川支部〕 対応：馬場、皆川
- 15：大阪野生動物リハビリテーター養成講習会〔大阪支部〕 対応：中津、講師：皆川
- 16：神奈川県野生動物リハビリテーター研修会〔神奈川支部〕 対応：馬場、皆川
- 25：ボーイスカウト日本連盟機関誌「スカウティング」取材・インタビュー 対応：新妻
- 28：川崎市立中学校4名体験学習（野生動物ボランティアセンター）〔神奈川支部〕 対応：皆川

=== 2 月 ===

- 01～02：東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習（水鳥救護研修センター） 対応：皆川、箕輪、鈴木
- 04：WRV 監査 出席：新妻、皆川、倉林、小森、箕輪
- 04：WRV 東京都支部監査 出席：新妻、倉林、小森、箕輪
- 05：神奈川県野生動物リハビリテーター6期生認定式〔神奈川支部〕 対応：馬場、皆川
- 08：川崎市立中学校4名体験学習（野生動物ボランティアセンター）〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 09～10：第3回油等汚染事故対策水鳥救護研修 対応：新妻、皆川、箕輪、鈴木
- 16：大学生向け野生動物救護ボランティア体験（横浜市立金沢動物園）〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 18：平成22年度油等汚染事故対策水鳥救護研修 現地研修（香川県高松市） 対応：新妻、皆川、箕輪、鈴木
- 23：川崎市立小学校6年生学校訪問授業〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 25：平成23年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」協賛申込・締切り 対応：箕輪
- 25：KWR サロン（リハビリテーター同士の勉強会）〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 27：神奈川県野生動物リハビリテーター6期生横浜市立野毛山動物園傷病鳥獣施設見学〔神奈川支部〕 対応：皆川

=== 3 月 ===

- 10：TOKYO-FM 番組「SUNTORY SATURDAY WAITING BAR」取材収録 対応：皆川
- 12：平成23年度WRV総会（立川事務所） 出席：新妻、大窪、皆川、馬場、小松、倉林、小森、箕輪、鈴木
- 12：平成23年度WRV東京都支部総会（立川事務所） 出席：新妻、大窪、小松、倉林、小森、箕輪、鈴木
- 13：神奈川県野生動物リハビリテーター6期生横浜市立金沢動物園傷病鳥獣施設見学〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 20：春の動物園まつり（川崎市立夢見ヶ崎動物公園）〔神奈川支部〕 対応：皆川
- 24：平成23年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」ポスター納品 対応：箕輪

野生動物救護獣医師協会（ホームページ）<http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 76 2011.3.25 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：皆川 康雄
